

町田会長

# 「郷土創生」貢献を強調

平成 27 年度通常総会

『秋高百年史』によると、秋田中学校同窓会は、大正4（1915）年8月22日に雨天体操場で発会式が行われた。学校創立から実に42年後のことだが、この時既に卒業生は1200人を超え、卒業生同士の連絡不通をかくつ声（ほうはい）が澎湃と湧き上がっていたという。今年はその同窓会設立から数えてちょうど100周年。節目となる平成27年度通常総会は6月21日、秋田市の秋田ビューホテルで開かれた。

## 同窓会設立100周年 会則にも理念盛り込む

会場は300人近い出席者でびっしりと埋まり、校歌の斉唱に続いて町田会長が挨拶に立った。この中で町田会長は、日本創成会議が発表した2040年の人口推計で、秋田県は大潟村を除く24の自治体がごとごとく消滅可能都市になると指摘された点に触れ、「同窓会の目的に掲げている『会員相互の親睦』や『母校の発展』も、そもそも地方創生なくしては実現できないものだ」と述べ、同窓会として今後、ふるさと秋田の創生にも力を入れ、郷土の発展に貢献していく考えを強調した。

また、伊藤校長も挨拶の中で、地方創生の要は人材の育成にあるとして、「世界的な視野を持つグローバルな人材を育てるため質の高い教育活動を展開していきたい」と語り、学校としても地方創生を後押しする考えを示した。続いて議事に移り、まず会則の一部改定案を議題とした。このうち「会員相互の親睦を図り、母校の発展に尽くす」ことを同窓会の目的に掲げた第2条に、「郷土の創生に尽くす」を加えた改定案が提案され、満場の拍手で承認された。

また、「顧問・参与に関する規程」については、①顧問は現行どおり「本会に功績のあった者」とする一方、「母校の校長経験者の中から」としていた参与は「母校の校長経験者等から」とし、会長が「運営委員会に諮り、委嘱する」に変更②顧問、参与の職務は現行の「必要に応じ会長等の相談に応ずる」から「本会の目的達成のため必要な助言を行う」に変更、とする改定案が提出され、いずれも異議なく承認された。

平成26年度の会務報告と事業報告に続いて決算報告が行われ、収支ともに予算の執行は適正だったとする監査報告を受けて26年度決算は原案どおり認定された。さらに総額2千485万円にのぼる平成27年度一般会計予算案が提案され、満場の拍手で原案どおり承認された（26年度決算と27年度予算の詳細は別掲）。

ただ、一連の質疑の中で会場から手が挙がり「同窓会事務局に関する提案」と題する意見書が緊急動議として出された。発言者は議長の許可を得て出席者にこれを配り、実効性のある事務局体制の実現を訴える一幕があった。

意見書は理事有志一同の名前でA4判2ページ。およそ

天上天下  
TENJO  
TENGE

炊きたての新米の馥郁たる香ばしさがうれしい季節である。だが、コメを取り巻く環境は内外ともに厳しさを増すばかりだ。▼その一つ、日本穀物検定協会（特A）。設定された1989年は、あきたこまちとコシヒカリの2銘柄だけ、産地も全国13地区に過ぎなかった。ところが2009年には6銘柄20地区に増え、14年は一気に16銘柄42地区に急増した▼常連あきたこまちのライバルは北海道から四国、九州まで全国に広がった。消費低迷の中、生き残りをかけた産地間競争は熾烈をきわめている▼銘柄の産地数ではコシヒカリの19がダントツのトップ、ひとめぼれ5、つや姫とヒノヒカリ各3が続き、あきたこまちはわずかに1の劣勢である▼県農業試験場が育成した新品種「つごぞろい」と「秋のきらめき」が今秋デビューした。2019年をめどにこまちをしのぐ極良食味米の開発も進んでいるという。31年間孤塁を守ってきたあきたこまちに続くこれら新品種が、秋田のブランド米として再び全国トップの座に躍り出る日を楽しみに待ちたい。